第三十八話　姫の目的

『のら』は奥の台所に行き戻ってきた。そして姫にお茶を出した。姫は「お茶、しけた家ね」と言いながら、そのお茶を飲んだ。姫の顔色が変わった。「随分と美味しいじゃない。このお茶どこで買ったの」と『のら』に尋ねた。『のら』はニコニコしながら、窓越しに見えるベンジャミンの木を指差した。その方向を見た姫は、頭を傾げながら、「ずっと遠くってことね」と言って、お茶を飲み干した。

「ところで、この前言っていた指輪を見せなさい。今日はそれが目的で、ここに来たんだから」と言って、自分の指に付けた指輪を『のら』に見せびらかした。「これはダイヤ。これはサファイア。そしてルビーにエメラルドよ。これより綺麗なの。その指輪。早く見せなさい」としつこく迫った。『のら』は「ちょっと待って」と言って、何故か家の外へと出て行った。「変な子ね」と姫は言いながら、何時の間にか二杯目のお茶を飲み干していた。

『のら』が戻って来た。泥だらけの手には、銀色の指輪が握り締められていた。そして「これ、ほら、ピカピカして綺麗でしょ」と言って、姫に見せた。姫は「ふん。ただのプラチナのリングじゃない。普通は宝石が付いているものよ。ただの安物じゃない。ちょっと見せなさい」と言って、『のら』から指輪を取り上げた。そしてじっと見ていた姫は、リングの内側に何か書かれていることに気が付いた。「何々、M・・・1・・・汚くて読めないわ」。その時『のら』が「返して」と言って、姫の手にしがみ付いた。勢い余って姫はイスから落ちてしまった。